

消防力を超えた大災害(1995年3月号掲載・池内 清)



1月17日午前5時46分、待機室で仮眠中、「ドーン」という激しい突き上げを受けて、慌てて飛び起きた。さらに「ガタガタ」と激しい揺れに上体を起こすことができなくなり、うつ伏せになって揺れが収まるのを待った。この間、15秒ぐらいだったと記憶している。

当務の職員は、慌てた様子を隠し切れず、「これ何なんやー」「地震やー」と叫んでいる声が聞こえた。

急いで車庫に出ると、暗がりの中でガス臭が漂っていた。車庫内を見渡すと、スノーケル車は柱に寄り掛かるように傾き、他の全車両が定位置から動いていた。

棚に収納していたホースは落下して散乱し、機械庫や工作室も資機材が落下、散乱していた。

「余震に気をつけろ!」「ガスの火を確認しろ!」と矢継ぎ早に指示しながら情報通信室へ急いだ。

「大丈夫か」と勤務者に声をかけながら、携帯無線機と携帯電話を取り、庁舎の前に出た。

道路は地割れをしており、庁舎北側の国道 2 号線を隔てて向かい側の民家(木造 2 階建て)はすでに倒壊していた。要救助者がいるものと判断し、1 隊を出動させた。

それに時を同じくして、一人の女性が「助けてー」と駆け込んできた。

続いて東方面と南方面を見ると大きな黒煙が立ち昇っていた。煙の方向から判断して、青木方面に化学車隊(東灘 13)を出動させ、魚崎駅方面へはしご車隊(東灘 17)にポンプ車(東灘 5)に乗り換えて出動するよう指示した。

管内の火災状況を消防本部管制室に無線で報告しようとしたところに、どこかの移動局が「…応援を頼む…」と送信するのが聞こえた。すると、本部からの「市内各所で火災発生、各所轄で対応せよ」との無線指令を傍受した。

さらに火災の推移を把握すべく庁舎で最も高い位置にあるホース干し塔に上った。

薄明かりの東方面で遠方に 5 本位の黒煙の上昇が視認できた。これらは西宮や芦屋市で発生した火災であったと思われる。さらに管内でも 2 本の黒煙の上昇が確認できた。続いて他の方面を見ると、南側に大きな黒煙が 1 本、北側に 4 本以上の黒煙と白煙が、西側にも大きな黒煙が見えた。さらに、西側の遠方では灘管内や葺合管内でも多数の火災が発生しているものと思われる黒煙の上昇が確認できた。

地震発生後僅か7分で発生した火災が所轄の消防力を遙かに上回っていることは容易に判断できたが、上司との連絡もままならない。

すると一斉に電話(加入電話)が鳴り始めた。この分では本署の各隊をやり繰りするのも大変だ。青木、深田池の両出張所の状況を確認し、それぞれの判断で出動するよう指示した。

突然、一人の警察官が「阪神電鉄の石屋川駅でもものすごく燃えている」と血相を変えて駆け込んできた。

しかし、消火活動のためポンプ隊は全て出動してしまっている。

「現在、全てのポンプ隊が出動している。非常招集をかけているから(出動)体制がとれ次第、すぐに出動させる」と応えるしかなかった。

続いて大勢の市民が「生き埋めやー」「火事やー」と雪崩込み、收拾が着かない。住所と氏名をメモにとるのがやっとのことであった。車庫内では応急救護所を開設した救急隊員が手当てに追われている。

本署に残ったはしご車の車載無線機で消火活動中の各隊に連絡をとると、自発的に出動した出張所のポンプ隊(東灘2)は、「渦森台から見ると管内の方々に火炎や黒煙を確認。山の手から順次消火していく」同じく自動的に出動した出張所のポンプ隊(東灘3)と化学車隊(東灘14)は、青木地区の火災現場からは、「東側に延焼中！ 応援を頼む。消火栓は使用不能。ホースを現場に……」

魚崎南町の火災現場に出動したポンプ隊(東灘 5)からも「応援頼む。ホースを現場へ」という報告があるが、「非常招集中だ、頑張ってくれ」と送信するほかなかった。

これらの交信も他の局との混信が強く、途切れ途切れであった。

地震発生から 1 時間を経過しようとしている。車庫内は負傷者で埋まり、パニック状態だ。救急隊員が応急処置した負傷者の数は、50 数名に達している。

非常招集で参集した職員で 1 隊(東灘 15)を編成し、警察官から要請を受けた御影石町の火災現場への出動を指示した。

この時点でどうにかこうにか炎上火災の現場で手付かずの所はなくなった。

さらに参集した職員でもう 1 隊を編成するため、出動準備に取りかかっていた。指揮は参集してきた山根消防指令に引き継ぎ、私は最大規模の火災現場へと向かった。

消火活動を支援すべく現場到着すると、生き埋め 5 ヶ所、計 8 名の救助要請を受け、以後 11 時間に及ぶ救助活動が続いた。